

王心齋年譜

疋田啓佑編訳

門人、張峯（号、玉屏）編纂。『王心齋全集』卷一所収によ

る。先生、初名は銀、後に良に改めた。字は汝止。心齋と号した。揚州府の泰州、安豊場の人。王氏の『族譜』によると、唐の僖宗の時に兵部尚書王璧（諡、大猷）の後裔にかわりがあり、始祖の王伯壽から王良に至まで七世、董燧等の撰による『年譜』⁽¹⁾によると始祖の伯壽から国祥―仲仁―文貴―僖―江―良という系譜である。父の王江（字は紀芳、号は守庵）は竈丁（製塩業者）であったが、人柄が古朴坦夷で、郷党から長者と称されていた。

明、憲宗の成化十九年（西紀1483）、一歳。

夏、六月十六日に生まれた。生まれつき、手に肉の珠が左に一つ、右に二つ有った。後に、身の丈九尺、高い額、瘦せてゴツゴツして骨張った険しい顔つきとなった。

孝宗の弘治二年（1489）、七歳。

郷里の塾で塾師より経書（『大学章句』等）を学び、口に任せて談説し、或るときは人を諭し導くこともあったが、塾師はこれを非難することはなかった。

六年（1493）、十一歳。

貧乏のため束脩を納めることができなくなり、塾を辞めて家の仕事（製塩業）に従事した。

九年（1496）、十四歳。

母が亡くなり、喪に服しひどく悲しむ。

十四年（1501）、十九歳。

父の命令によって、国中を商いして回り、山東を旅して、孔子廟を拝し聖人の道を志した。

十五年（1502）、二十歳。

妻に呉氏を迎えた。

十六年（1503）、二十一歳。

家の仕事に従事する際、家の財産の運用方法の仕方に、これまでのやり方にとらわれない商法を用いることによつて、財を蓄え、家は日ごとに豊かになり、隣里郷党のために余剰の財を用いた。初めは多くの人はこれを奇異のこととしていたが、その後は誰でもができることではないと考えるようになった。

十八年（1505）、二十三歳。

山東を旅している時に病氣になり、医家の手当を受け、それに因り、いよいよ心の在り方を究めるようになった。

武宗の正徳二年（1507）、二十五歳。

山東を旅して孔子廟に拝謁し、感嘆して言った、「孔子も人間であり、私も人間である」と述べて、奮然として古の賢人を友とする志を抱くようになり、『孝経』『論語』『大学』を学び朗誦した。またそれら經書をいつも袖の中に入れていて読み、疑わしい所があると人に逢う度にそれを質した。十二月には、長子の衣（1507—1506、字、宗乾。号、東堦）が生まれた。

三年（1508）、二十六歳。

冬、十一月、父の守庵公が戸役の急な用件で早起きし、役所に赴くため、冷水で顔を盥うのを見て、痛哭して言

った、「子供がいても親がこのように苦勞している。子供が代わつてしなければ」と、親の役と交代することを願っている。それ以来、晨省夜問（朝夕のご機嫌伺い）を古礼のように行つた。

四年（1509）、二十七歳。

聖学の道にまだ真に理解していないところがあつたので、毎日毎晩、黙坐静思して、悟るまでに至り、必ず聖賢になろうという志を持った。

六年（1511）、二十九歳。

或る夜、天が墜落してきて身を圧つぶし、万人が大声で叫び助けを求める夢を見た。その夢の中で臂を奮つて天を押し返し、太陽や月、星座の順序が乱れているのを見て、自分の手で元のように正しく並べ変えたので、万人が躍りあがつて喜んで拝謝した。夢から醒めると汗を雨に濡れるほどかいていた。その時、はっきりと心と体とを洞徹して、万物と一体になり、宇宙こそ我に在るのだという考えが切実に感じられた。そこで壁に、「正徳六年、仁に間居すること三月半」と書きつけた。冬十二月、次子の襪（1511—1587、字、宗順。号、東厓）が生まれた。

七年（1512）、三十歳。

斗室（小部屋）を家の裏に築き、暇なときはそこで戸を閉ざして坐息して書を読み、昔のことを考えて琴を奏でて雅歌した。

九年（1514）、三十二歳。

經典を説くに当たっては、伝註には拘泥せずに、自得したもので解明した。それを聞く人も悦び満足した。一族の人や、その役人から普通の人まで、処理し難い事がでてくると、いつもたずねて来て質問したが、そのたびにたちどころに裁決して、少しも間違わなかった。

十年（1515）、三十三歳。

家族が多くなり、それにつれて家業も繁雑になったが、監督するに際しては厳しく、客が来ても仕事が調わないと客には会わないほどであった。

十一年（1516）、三十四歳。

ある時、異腹の弟の結婚式が終わり、その妻たちの化粧箱の厚薄が同じでないことについて不平を言う者がいた。そこである日、親を堂上に座らせ、その座前で香を焚いて、皆を戒めて言った、「家族が離れて行くのは、財物が等しくないことから起きる」と。だから各自持つてい

るものを庭の中に出させて置き、それを混ぜて同じようにして持ち帰らせたので、一家の人々は安心した。

十二年（1517）、三十五歳。

里の習俗に、神仏の像を祭ることがあったので、父の守庵公に、一般の庶民は祖先を祭らねばならないことを述べて、神仏の像を焼いて、朱子の『文公家礼』によって、四代の位牌を祭らせた。

十四年（1519）、三十七歳。

武宗が南巡した時、武宗の嬖幸の宦官が、土地の人に、狩りのための鷹と犬を供出するよう求めたことに、心齋は、この地方は貧しく、狩りをしなくなつて久しいこと、人が食うだけで精一杯で狩りをする余裕などないこと、そして天地の間で最も尊いものは人間であり、禽獣のために人間が害されてはならないことを述べて、鷹と犬の供出を拒わった。

夏、五月、三子提（1519—1587。字、宗飭。号、東隅）が生まれた。

十五年（1520）三十八歳。

王陽明が良知の学を、豫章で講じていることを、塾師黄文剛から聞いた。そして王陽明の良知の学と自分の学問

が似ていると聞いた心齋は、「王公、良知を論じ、某、格物を談ず。もし其れ同じきや、是れ天、王公を以て天下後世に与ふるなり。もし其れ異なるや、天、某を以て王公に与ふるなり」と言つて、すぐに舟を買つて出かけて行き、二首の詩（「初謁文成先生詩」）を贄として差し出た。王陽明に会うことができた。其の際、陽明の前に出て、自分から上座に坐り、陽明と論じ合つた。論は、真人は夢を見ないということから始まり、天下の事にまで及んだときに、陽明は、「君子の思ひは其の位を出でず」と言つたのに、「某、草莽匹夫にして、君民の心を堯舜にせんと、未だ嘗て一日も忘れず」と応酬した。このように論じ合いながら、王陽明の致良知の論を聞くに至つて、「簡易直截、予の及ばざる所」と言つて、座を下つて拝礼して歸つた。歸つてから、今日のことを反省してみると、まだ納得のいかないところがあり、軽率にも拝礼したと後悔し、翌日再び陽明に会つて其の旨を述べて論じ合つた。その結果、心から大いに服することになり、弟子の礼を執り、師事することになった。

王陽明は門人に語つて曰く、「吾、宸濠を擒へ、一も動く所なし。今、却つて斯の人（良、心齋）のために動かさ

る。此れ真に聖人を学ぶ者なり」と評している。心齋は、初め銀と名のつたが、王陽明が、『易経』より、良と名付け、字を汝止とした。

嘉靖元年（1522）、四十歳。

王陽明は父の喪に遭つて会稽に家居していたので、会いに行き、「千載の絶学、天、吾が師を啓き、これを倡え、天下をして聞くを及ばざること有らしむべけんや」と言つて、歸つてから「鯢鱖賦」を作つた。また蒲輪車（古代のスタイルの車）を作つて、それに乗つて都へ出たりした。

二年（1523）、四十一歳。

春、会稽に行く。夏、淮揚地方は飢饉となり、民を救うため、真州の友人王商人から米二千石を借りて救済に当たつた。巡撫から、何の書によつてこのような考えを持つたかについての諮問に、『大学』と『中庸』からと答えた。また秋には疫病がはやつた時も、広く薬劑を施して多くの人を救つた。

三年（1524）、四十二歳。

春、正月、四子の補（1523—1573。字、宗完。号、東日）が生まれた。会稽に行き、書院の建築を申請した。

父の守庵の誕生祝いに、陽明公は蔡世新に呂仙図を描かせ、王琥に文を撰させた。冬、十二月、帰省した。

四年（1525）、四十三歳。

春、正月、守庵公を奉じて諸子姪らと会稽に行く。鄒東廓が翰林学士から左遷されて広徳の判官となり、そこで書院を作って、心斎を招聘して講義をさせた。心斎は「復初説」を書き、東廓はそれに因んで復初書院と名付けた。

秋、七月、心斎は招かれて学宮で講義をし、自分の考えを詩に表し、学宮に刻んで学生に示した。

五年（1526）、四十四歳。

秋、八月、王瑶湖が泰州に作った安定書院で講義をし、この書院を去る時に、「安定書院講学別言」を書き、瑶湖が職を転じて移動する時には、「明哲保身論」を書いて贈った。また「楽学歌」を作った。

六年（1527）、四十五歳。

湛甘泉、呂涇野、鄒東廓、欧陽南野と金陵の新泉書院で会った。甘泉は「随所に天理を体認する」の六字を講じたが、これは陽明公の考えと少し異なっていた。そこで心斎は「天理良知説」を書いた。

秋、九月、陽明公が両広を征するために出立するのを送り、冬に帰省した。この年、五子の榕（1527—1544。字、宗化。号、漁海）が生まれた。

七年（1528）、四十六歳。

同門の人と会稽書院で会う。そこで心斎は、「百姓の日に用ひる処は、安排を仮らず。俱に是れ帝の則に順ふのみ」と述べて、百姓日用の学を説いた。

冬、十月、王陽明公の訃報を聞き、柩を桐廬に迎えに行き、同志の人と陽明の家の遺産相続などの問題を処理した。

八年（1529）、四十七歳。

冬、十一月、会稽に行き、王陽明公の葬儀を行った。

九年（1530）、四十八歳。

鄒東廓、欧陽南野、万鹿園等と会い、金陵の鶏鳴寺で講義をした。夏、五月、会稽に行き、王陽明の嗣子正億のために、黄綰の娘との婚約を調えた。

十年（1531）、四十九歳。

冬、十一月、徐樾と月光の下、星の現象について語り、天地との交流について、また小さい溝を飛び越えるに際して、邪念無く心を開放することを説いた。

十一年（1532）、五十歳。

周良相、呉標、王汝貞、程伊、程俸ら来学。なかでも汝貞の学問の進みが悪く苦しむのを見て、「学問は人を累すものではない」と言い、傍らの木を切っている匠人を指して「彼は功を求めて仕事をしているのでないが、それでもこれまで仕事を続けている」と述べて、学問の在り方を教えた。

夏、五月、会稽に行き、文成公家を訪ね、正億を連れて金陵に赴き、黄綰に託した。

十二年（1533）、五十一歳。

諸友と金陵に会した。黄洛村はいつも「不欺」について講義していたのに対し、心斎は、「学兄は欺くことが多い」と言ったので、洛村は驚いて、その証拠を問うたところ、「さし向かいで食事をしているとき、またしようとしている時に、客が門に来たら、不在だと断るときがあった。それは欺くことではないか」と言ったので、洛村は謝ったので、「変に通じることでも宜しいことで、どうして欺くことになるのか」とも答えたので、座に在る人は反省させられたと。

十三年（1534）、五十二歳。

呉怡ら数人が来学し、彼ら友とくつろいでいた時、心斎は昔、先師王陽明先生とある寺に遊んだときのことを話した。

寺でくつろいで酒を飲んでいるところを、太守が通りかかり、酒席に加わったが、皆は酒を飲み続けているので、陽明公は、門弟たちに、君たちはまだ修行が足りない麻木（鈍感）で恐ろしいと言い、その理由を汝止（心斎）に聞いてみるという。そこで心斎が、太守が酒宴に加わった時に、誰も立ち上がり（礼）もしないで飲んでいたので鈍感だと説明したので、皆は恥じ恐れた由。心斎の教え方はこのような教え方をとることも多かった。

夏、五月、林東峰、沈石山らが泰州に訪ねて来たので、金山に遊びに行った。江都の令王卓峰、林東峰らと興にまかせて山に登った。東峰について卓峰は追いつつ上ったが、追いつけず気は喘いだ。心斎は卓峰の気が落ち着くのを待ってゆっくり山頂に登った。そして東峰に、「君は同行者について察しながら登らないのか」と言い、同行者が気を喘ぎ苦しんで登るのを顧みないのは仁者でない」と注意を促し、また東峰が裸足で地べたに坐っていたときも礼にあっていないと注意され、感謝している。

十四年（1535）、五十三歳。

この年、飢饉となった。心斎は、粟（穀物）を供出することをし、そのため富者の廬月溪に頼み、廬氏は心斎の言に感じて、穀物一千五百石を義捐として供出した。御史の徐芝南に請うて、心斎は惻隱の心で民を救済しようとし、それが徐芝南の心に、民の飢えを忍びざるの心を発させた。

十五年（1536）、五十四歳。

春、正月、董燧、聶静が来学。ある日、董燧が瞑目趺坐しているのを見て、心斎は、「青天白日の下でどうして自分から鬼魅となろうとするのか」と言って、禪の方法を批判し、儒学との違いを悟らせた。

夏、五月、王龍溪が京口に來たのに会う。聶静は呉怡に招隱寺に遊びに行かせたが、その時、従者を先導させて行くと、心斎はこの遊びは、物と楽しみを同じくすることをするのだと言い、人がしているのは官に従っているようなもので、誰と楽しみを共にするのかと言って帰らせて、金陵に行き、靈谷寺で遊び、皆で歌ったりした。

心斎は、「これが伏羲（遠い古代）の頃の姿だ」と言い、後にやって來た王龍溪も同じ遊びをして、「これは堯舜禹

三代の姿だ」と、また下僕が門外で騒いでいると、「これは五伯（春秋の五覇）の姿だ」と言っているが、これは現実社会に対する心の感応によって生じたもので、昔を観るだけではなかった。

秋、八月、御史の洪覺山が来訪。簡易の道を論じた。覺山は、『論語』の、「仁者は難きを先にして、獲るを後にす」について論じ、心斎は、「一日己に克ちて礼に復れば、天下仁に帰す」で答えた。覺山は、東淘精舍を建てた。そこに董高、朱錫、喻仁傑、喻人俊、羅楫ら学者が集まって講学したが、彼らは皆意気高く謙虚さに欠けていたので、心斎は「勉仁方」を精舍の壁に書きつけて、諸生に示した。

冬、十二月、父の守庵公が亡くなった。享年九十三。

十六年（1537）、五十五歳。

春、御史呉疏山公が心斎の廬を訪れた。冬、また泰州で会った。

十一月、疏山公より朝廷に推薦の上書がなされたが、断っている。

十七年（1538）、五十六歳。

心斎の住む安豊場の塩業の生産者は大小貧富の差があり、

居民に不満が在り、訴訟が絶えず、十年もの間、解決しなかった。州守の陳公らは、解決するために心齋に相談に来た。心齋は、そのためには土地の境界を定め、それを官にある冊(文書)に定め記し、また民にはそれに当たる票を渡してそれに従って分けて仕事をさせて守らせる。それを長く実施すれば争いが起こらなくなると建議した。公らはこれに従って策を実施してよく治まった。

張峯、胡大徽、程宏忠、陳応選、陳佐が来学。

十八年(1539)、五十七歳。

時に、四方から学びに来る者が日々多くなった。心齋は病気がちであったが、榻によりかかって講論し、少しも厭倦せず相手をした。羅念庵は心齋の廬に来て教えを請い、林東城に、「私は連日、心齋の学問を聞いているが、まだ全てを理解することができとは言えない。しかし、己を正し、物事の正しい処を学ぶときは、人を心から洗い流し、鼓舞させた」と言っている。その後、心齋は、「大成歌」を作って、念庵に贈った。

十九年(1540)、五十八歳。

冬、十二月八日、卒す。

これに先立ち、室内が一晩中、光が輝いていて、地面を

照らしていた。多くの人は、瑞祥だと思った。その時、心齋は、「吾、將に逝かんとす」と言った。臨終に際して、弟子たちが泣いて後事を聞くと、仲子の襪を顧みて曰く、「汝、学を知る。吾、また何をか憂へん」といい、次に弟たちを顧みて曰く、「汝、兄有り。此学を知る。ただ爾ら善くこれに事へよ。人生の苦患・離索はただ時序。友朋、精舎に於いて相与に切磋すれば、自ら長益有らん」と。その後、神氣凝り定まり、ついに瞑目した。この時は八日子の時であった。一か月後、安豊場の東の、父守庵公の墓の右に葬った。これは遺命に従ったのである。四方より会葬した人は数百人あったという。

注

(1) 董燧の「年譜」は、袁承業新輯本の『心齋王先生全集』本(内閣文庫蔵)に収められているが、本年譜は張峯の編纂によるもので、和刻本『王心齋全集』(嘉永元年版、中文出版社影印本)より訳出したものを中心としている。従って佐野公治氏、龔傑氏等の研究も参考にした。

(2) 龔傑著『王良評伝』には、十二月六日とし、それを西暦に換算して一五四一年一月二日としている。(P12)

(福岡女子大学名誉教授・陽明学研究所客員研究員)